

被災地域の復興まちづくりに向けたランドデザインの役割に関する研究 —大分県津久見市を事例として—

福岡大学大学院工学研究科建設工学専攻
福岡大学工学部社会デザイン工学科

学生会員 ○諫山裕生
正会員 柴田久,池田隆太郎 学生会員 江戸加那子

1. はじめに

大分県津久見市(以下, 市)では, 平成29年9月17日に発生した台風18号による豪雨によって市中を流れる津久見川の氾濫が引き起こされ, 床上浸水556戸, 床下浸水360戸の甚大な被害が発生した¹⁾. 上記被害を受け, 市では津久見川における激特事業等とともに市街地を含む復興まちづくりが進められている. また令和元年からは, 上記まちづくりの一環として今後10年にわたる市中心部の活性化を目指すハード・ソフト両事業の将来ビジョンを描く「市中心部のランドデザイン(以下, ランドデザイン)」の作成が進められている.

本研究では, 津久見市におけるランドデザインの作成過程を詳述し, 被災地域の復興まちづくりに関するランドデザインの役割と留意点について市民意見をもとに考察する.

2. 市における整備課題の調査

平成27年度から平成29年度にかけて福岡大学景観まちづくり研究室(以下, 大学)は「津久見観光周遊性創出事業」のアドバイザーとして携わり, 市民ワークショップによる協議を経ながら市中心部の課題について整理している. 大学は上記ランドデザインの作成においても同様に市内の現地踏査ならびに市民意見を聴取する「ランドデザイン会議」の進行に携わっている. 現地踏査ではまず現状の津久見駅北側及び駅前広場におけるロータリー機能, 歩道と駐車場間にみられる空地など, 空間的な課題が把握された. また駅自体についても改札が2階にあるのに対し, エレベーターは設置されていないなどの課題も抽出された. 一方, 市の中心に位置する駅前通りにおいても舗装や街灯の不統一, 経年劣化の影響による舗装ブロックの色落ちや起伏が看取された. またJRの踏切を有する市道岩屋線はかねてより幅員の狭隘さが問題視されており, 利便性・安全性の悪さが再確認された.

3. ランドデザイン作成に向けた施策・事業の整理

(1) 市中心部における現状と課題の整理

前述した現地踏査の結果と津久見市役所からの情報提供をもとに, 市中心部における空間的な現状と課題ならびに今後10年で実施予定の施策・事業を整理し, 図化した. これを踏まえ, 市中心部の活性化にとって重要な主要エリアや施策・事業の位置関係などを取りまとめたダイアグラムの作成を試みた【図-1】. これより, 観光の起点かつ賑わいの拠点

としての重要な津久見駅の役割や予定されている庁舎移転計画における駅前通りの位置づけ等について再確認がなされた.

(2) 将来像のイメージ図

前述したダイアグラムによる再確認を踏まえ市中心部における活性化拠点についてあるべき将来イメージ図を作成した. まず駅前通りについては, 街灯をダークブラウン色に統一し, 舗装ブロックの改修など, 通り全体が一体的で落ち着いた雰囲気になるイメージが示された. さらに津久見駅北側の駅前広場では広場全体にかかるシェルターを新設するとともに, 舗装を駅前通りと同色に揃えることで広場と通りの一体性を図る提案が描かれた【図-2】. また駅の南北への移動も考慮し, 前述したエレベーターの設置についても図示された. さらに駅南側にのびる跨線橋のデザインを一新し, 洗練された駅空間全体の雰囲気を目指すイメージが描述された. 加えて狭隘さが問題となっている市道岩屋線の拡幅された道路の様子も示されている.

4. ランドデザイン会議開催による市民意見の聴取

前章で示された現状と課題, ダイアグラム, 将来像のイメージ図に対する市民評価を得るため, 令和元年11月14日にランドデザイン会議を開催し, グループワークによる意見の聴取とランドデザイン作成に対するアンケート調査を実施した. その結果, まず「ランドデザイン会議の良かった点」について伺ったところ「未来予想図の提案は参考になった」等のダイアグラムや将来像のイメージ図に対して評価する意見が参加した市民24名中8名から得られた. その他にも「今後の市が向かう方向と可能性が見えて来た」「将来の津久見に夢が持てた」等の意見が4名から得られた. 次に「復興まちづくりを考えるうえでランドデザインや将来像のイメージ図は役立つか」という質問に対して「市民の意思, 方向性を統一しやすい」「市がどのように考えているのかを知る材料となる」「全体的にまちが見渡せて計画が立てやすい」等の意見が9名から得られた. また「市民の防災意識が高くなる」「実現できるよう協力していこうと前向きな気持ちにさせてくれた」等の内容も3名から得られた. 一方「実際に被災した人間の気持ちに立ったもの, 思い描いた理想に近い形でイメージしてくれたのではないか」等の大学の作業に対する回答も2名から挙げられていた. これに対し, 「行

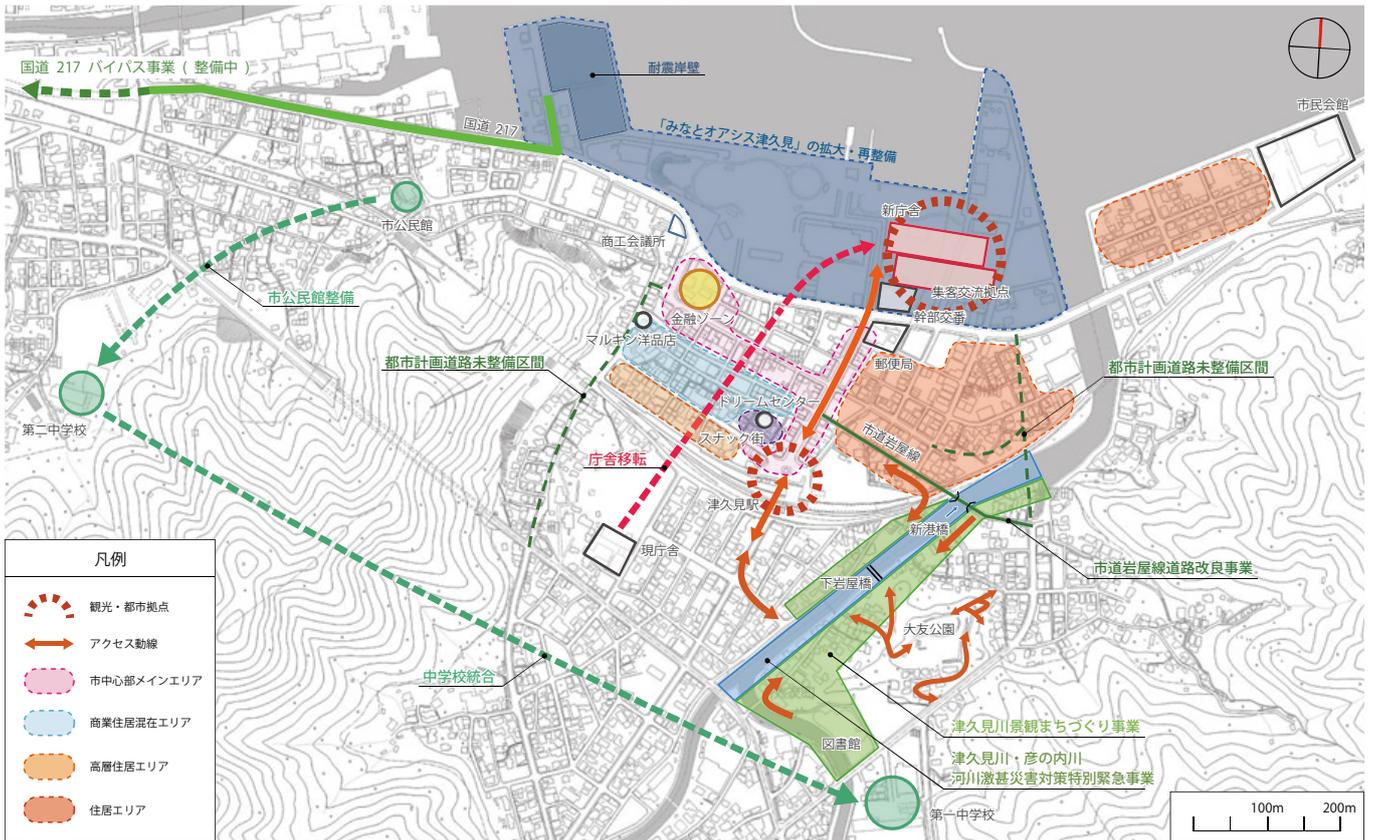


図-1 市中心部のダイアグラム



図-2 津久見駅北側の将来イメージ

政資源の投下を夢見に集中させることのリスクも感じる」といった将来像を提示するうえでのリスクについて言及した市民も見受けられた。最後に「ランドデザインや将来像を可視化することの必要性はあるか」という質問に対しては「イメージしやすく、メリットもデメリットも発見しやすい」等の意見が大半の20名から得られた。

5. 被災地域におけるランドデザインの役割と留意事項

(1) 「見える化」による市民意識の向上と戦略的価値

ランドデザインの提示は、まちの現状や課題、施策を「見える化」し、市民により理解しやすい形で行政の意向を伝えられる施策として有効といえるだろう。また市民の防災意識の向上とともに、将来に対して「実現できるよう協力していこうと前向きな気持ちにさせてくれた」等、被災後のまちに対する市民の積極的な姿勢につながる契機となりうる可

能性が把握された。また市民からは「メリットもデメリットも発見しやすい」「全体的にまちが見渡せて計画が立てやすい」といった意見も得られていた。すなわち「見える化」されたランドデザインは、災害後の短期に集中する復旧・復興事業推進に際し、まち全体を通じた俯瞰的かつ戦略的なプロジェクトマネジメントを促す資料的価値を有すものと考えられる。

(2) 提案者に対する信頼性担保の重要性

また「行政資源の投下を夢見に集中させることのリスクも感じる」といった否定的な意見も把握され、将来像の提示には、理想に終わらず提案の現実性にも十分留意する必要がある。一方で大学に対し「実際に被災した人間の気持ちに立ったもの、思い描いた理想に近い形でイメージしてくれたのではないか」との意見も得られていた。これは被災前から市のまちづくりに携わり、市の状況や課題を把握していた提案者の実績が提示した将来像への一定の評価につながったものと推察される。すなわち、復興まちづくりにおけるランドデザインを示す際には、被災前の活動実績など、提案者に対する信頼性の担保が重要な条件となり得ることが指摘できよう。

【参考文献】1) 津久見市中心部の活性化に関する検討委員会資料:2級河川津久見川水系 津久見川・彦の内川 河川激甚災害対策特別緊急事業, 平成 30年 6月 29日